
それが正解 改訂版

春谷公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それが正解 改訂版

【Nコード】

N0266BA

【作者名】

春谷公彦

【あらすじ】

夏休みのある日、海にやってきた大学生の猪狩康平、矢式奈美香、藤井基樹、新川怜奈の四人。その晩、ホテルで女性が死体となって発見される。現場は密室。彼らは、たまたま知り合った探偵・真崎と共に事件に挑む。

登場人物

・O大の学生

猪狩康平	いかりこうへい	O大二年
矢式奈美香	やしきなみか	O大二年
藤井基樹	ふじいもとぎ	O大二年
新川怜奈	にかわれいな	O大二年

・ホテルの客

真崎和哉	まさきかずや	探偵
秋山美冬	あきやまみふゆ	OL
尾崎駿介	おさきしゅんすけ	フリーライター
中井夏美	なかいなつみ	H大二年
武井嘉男	たけいよしお	自営業
武井紀子	たけいのりこ	主婦

・その他の人々

林拓馬	はやしたくま	ホテルのオーナー
林凜子	はやしりんこ	拓馬の妻
高石貴裕	たかいしたかひろ	ホテルの従業員
大竹	おおたけ	刑事
竹口	たけぐち	刑事

プロローグ

「海に行こう！」

すべてはこの一言から始まった。

午後八時。いかりこうへいここは居酒屋の一角。猪狩康平、やしきなみか矢式奈美香、ふじいも藤井基樹、とき新川怜奈がそこに集まっていた。

彼らは〇大の二年生であり友人である。彼らが友人となった経緯は定かではない。ただ、なんとなく行動を共にし、ただ、なんとなく暇があれば四人集まって飲んでいるわけである。

そして、ただ、なんとなく友人なのである。

今回はテストが無事終わり、夏休みを迎えたことによる飲み会だった。

先ほど、ビールジョッキ片手に「海に行こう！」と言い出したのは藤井基樹である。

彼は坊主頭が伸びたようなソフトモヒカンで、見た目の通り活発な青年だ。

「どうせなら泊まりだ」誇らしげに藤井が言う。

「お、いいねえ」そう言ったのは矢式奈美香。

積極的に賛同し、笑顔でうなずく。赤みがかった長髪が揺れた。

「いつ？」新川怜奈が尋ねた。

彼女も表情は明るい。セミロングで、奈美香と対照な黒髪が印象的な女性である。

「いつでも。なんてったて夏休みだからな。」なんこつのから揚げに手を付けながら藤井が答えた。

「どこに？」ビールを飲みながら聞いたのは猪狩康平。

行く前提で聞いているのだろうが、その表情からは肯定的な感情がうかがえない。

「海」当たり前だといわんばかりに藤井が答える。

「いや、だからどの？」呆れたように猪狩は聞いた。

「うーん。どうすっかな」藤井は石焼ビビンバを皿に盛りながら考えている。

決めていなかったのか、と呆れ顔のまま猪狩はため息をついた。男にしてはわりと長く、くしゃくしゃになった髪をかいた。

「おいおい、ため息なんかつくなよ」

「あ、私いいところ知ってるよ」と怜奈。「伯父さんがやってるところなんだけど、浜辺が綺麗なんだって。安くしてくれると思うよ」「おっし、それ！」奈美香が大声で言う。ビシッと怜奈の方を指差した。

「それでいいんじゃない？」猪狩も賛成する。「それと、人を指差すな」

「うん、じゃあ聞いてみる」指差された本人は気にしていないようだ。怜奈は何事もなく答える。

「よし、じゃあ、決まったことだし飲みましょ！」奈美香がビールジョッキを高々と挙げた。

「今までも飲んだ」猪狩が揚げ足を取るようにボソツと言う。

「うるさい！」奈美香は声を低くして猪狩を睨んだ。「あんたもつと飲みなさいよ！」彼女はビールを猪狩の前に突き出した。

一章 開始する学生の余暇と持続する彼らの猶予について

1

八月八日、奈美香はＪＲ・Ｓ駅の改札前にいた。

三日前の飲み会の翌日、怜奈からメールがあり、伯父の伝手で部屋を取る事ができたという。海に行くのも泊まりに行くのも数年ぶりなので、この二日間で必要なものを買い今に至る。

奈美香が駅に着いたとき、既に猪狩がいた。彼は必ず一番早くに来る。ただ、時間に厳しいというわけでもない。常識の範囲内でさえあれば、他人が遅れても特に何も言わない。そして、基本的に時間を守るのは猪狩のみである。実は奈美香も三分の遅刻である。

ただ、この程度の遅刻をとにかくいう人間の方が珍しいだろう。

それに、細かいことを気にする人間は嫌われる。そういった概念があるために、時間を守らない人種というのが生まれるのだろうと奈美香は思った。

「いやあ、ごめんごめん」奈美香はとりあえず謝った。

「いや、べつに」猪狩の返事は素っ気ない。

彼は朝に弱い。朝に弱いというのに時間は必ず守るのだから脱帽ものである。

といっても今は十時で、猪狩以外からすれば朝というわけではない。十時が朝だと言えば、全国に数千万人いるサラリーマンに申し訳が立たない。

彼の朝の状態はいつもこうである。奈美香と猪狩は小学校から同じなので、彼女はこれに慣れていた。

実は、昼になっても機嫌の悪さが直るだけで、無口なのは変わらない。そして、歳を重ねるごとに無口になっていつているようである。

この現象はいったい何なのだろうか。彼の無愛想な顔を見ても答

えは浮かばず、彼女は周りを見渡した。怜奈が近づいてくるのが見えた。

「ごめん、遅れた！」彼女は笑っている。

これは彼女なりの謝罪の仕方であった。無垢なイメージの強い彼女だから許されるのだろう。おそらく自分が猪狩に向けて笑いながら謝罪したら、怒られてしまうだろうと奈美香は思った。

「いや、いいよ、おまえは。あいつのタチが悪い」猪狩が不機嫌そうに言っ腕を組んだ。

あいつとは藤井の事である。彼が一番時間にルーズである。

「ははは……」怜奈がフォローできずに苦笑いする。

藤井の時間のルーズ加減にはみなが不満を持っていた。

結局、そのあと藤井がやってきたのは十時半を過ぎていて、さらに悪いことに、彼は何も気に止めているようではなかった。

「何のために待ち合わせの時間があるのかわかったもんじゃない」

猪狩が藤井に聞こえない程度に呟いたのを奈美香は聞いた。

2

S 駅から電車で数時間、ようやく目的地である観光地にたどり着いた。駅からバスに乗り換えて、さらに十五分ほどで海に着いた。バスを降りると潮の香りが鼻をついた。

「すごい……」奈美香が呟く。

奈美香は海の景色に圧倒されていた。澄んだ青色の水が太陽の光を受け乱反射している。非常に清々しいまぶしさだった。

だが、それ以上に圧倒されたのが観光客の多さだった。

「人多すぎ。場所ねえじゃん」藤井が言う。

台詞とは裏腹に表情は明るい。たしかに、人多すぎるのは嫌だが、寂れている場所よりはるかに良いだろう。

「今日は土曜日だ。どうせ休みなんだから平日に来ればよかったのに」猪狩がぶっきらぼうに言う。猪狩のことだから、日程が決まっ

た時点ですつとそう思っていたのだろっ。

「あ……そうだね」その言葉を聞いて怜奈が申し訳なさそうに言った。

宿泊先まで用意してくれた怜奈が謝ることではないだろう。奈美香は猪狩の無神経さが癪に障った。

「あんた、そういうこと平気で言うんじゃないわよ！　せつかく怜奈が部屋とつてくれたのに」彼女は猪狩の頭をコツンと叩いた。

「いてっ……悪かった」猪狩は素直に反省したようだ。

「いいじゃん、活気がある場所の方が」と藤井。

「それにしてもよく部屋とれたわね」奈美香は怜奈に尋ねた。

なにせ今は繁忙期の真つただ中である。いくら姪の頼みとはいえ、一日や二日前に予約が取れるとは思えなかったのだ。

「えつとね、あれのせい」怜奈が進行方向とは逆の方を指して言う。

三人が振り返つて見ると巨大なホテルが建つていた。そういえばバスから見えていたなと奈美香は思った。

「あれのせいで客が引いちゃったらしいんだよね。もともと小さいところなんだけど」

「なるほどな。ああいうのリゾートホテルって言うんだろ？　ああ、嫌だ嫌だ。何でも大手がじゃばつてさ。商店街と一緒にだよ。小さいところは潰されちゃうんだよ」藤井がやれやれと肩をすくめて言った。

「あんた、適当なこと言つてんじゃないわよ。あんたこの間、家の近くに大型スーパーができて凄い便利とか言つてたじゃない」

「え？　いや、その……」藤井は口をパクパクさせながらも、言葉が出せないようであった。

「ただ、怜奈に自分の株上げさせようたつて無駄よ」

「な？　いや、ちょ、おい、助けてくれよ」藤井は猪狩にしがみついた。

「別に、どっちにも、メリットデメリットはあるよ。ただ、規模が小さいと、そのメリットを生かすのが難しくはなるけど」

「はあ……。って、俺の弁護になってなくね？」

「弁護してない」

怜奈はクスクスと笑っていた。奈美香もつられて笑った。

そのまま、海辺を左手にしばらく歩く。浜辺は端から端まで観光客で溢れているようだった。

「あ、ここよここ」しばらくすると怜奈がそう言っただち止まった。そこは、ホテルと言うよりはペンションに近いといえる小規模なものだった。ただ、二階建てのその建物は年季こそ入っているが、いまだ健在という印象を受けた。おそらく、しっかりと手入れがなされているのだろう。

扉を開けるとジャラジャラと音が鳴った。気になって扉を見ると鈴が付いていた。電子音ではないところが好印象だった。

ロビーはわりと広く、目の前にはカウンター、右手には大きなソファがあり、くつろげるようになっている。左手には扉があり、少し開いていた。中を見るかぎり食堂のように見える。

カウンターの横に通路があり、「ゆ」と書いた暖簾がかかっている。どちらかといえば洋風のこのホテルには似つかわしくなく滑稽に見えた。カウンターの奥に扉があり、事務室になっているようだ。鈴に反応したらしく、ちょうどそこから男が出てきた。こちらの姿をみとめると笑顔になって歩み寄ってきた。

「久しぶり、怜奈ちゃん」

「こんにちは伯父さん。今日はありがとうございます」怜奈が礼儀正しくお辞儀をする。

「どうやらオーナーのようである。白髪が少し混じった少し小太りの男だった。」

「いやいや、こっちの方こそ。向こうにホテルができてから結構厳しくてね……。」オーナーは苦笑いする。そして猪狩たち三人の方を見て自己紹介した。

「オーナーの林です。どうぞよろしく」

三人もそれぞれ挨拶をした。

「あの、伯母さんは？」

「元気だよ。ただ、今は手が離せなさそうだけどね」

「そうですか。じゃあ、あとでまた挨拶に来ますね」

「ありがとう。まず、荷物を置いてくるといいよ。君たちの部屋は二階だから。はい、鍵」四人はそれぞれ鍵を受け取った。

彼らは部屋へと向かう。ロビーの右に通路があり、通路の手前左側に階段、その奥には左右に三部屋ずつ、計六部屋あった。その階段を上って二階へと向かった。

二階には左に四部屋、右に四部屋。階段を挟んで対称だった。階段の目の前にはトイレがあった。

四人の部屋は左側の四部屋で猪狩が左角、階段側の奥の二〇五号室、藤井はその手前の二〇三号室。その向かいが怜奈の部屋で二〇八号室、右角が奈美香の二一〇号室である。四と九は無いようだった。

「さて、もう十二時だけどうする？」藤井が聞いた。

「お昼食べて、海！」奈美香は元気良く答えた。

なにせ、今回のメインイベントなのだ。これなくして、何をしにここまで来たのかという具合である。

「OK。じゃあどつかで飯食って、そのまま海行くなって事で。準備して行こうぜ」藤井がそう言って自分の部屋に入っていた。

3

猪狩は部屋に入って荷物を降ろした。部屋の中にはベッドと椅子、テーブルがありテレビがついている。窓際にはソファもあった。一般的という言葉が似合う部屋だった。高校の修学旅行で行ったホテルと構造はほとんど同じだった。ただ、こちらの方がグレードは低いようであった。ホテルは様々な人間のニーズに答えるために汎用性が求められるので、どこも似たり寄ったりになるのだろう。違いがあるとすれば和式か洋式かの差くらいであろう。

一泊なのでクロゼットに着替えを入れる必要はないだろうと考えて、バッグから出さずにそのままにしておいた。

海に入るのは面倒だから海パンは置いていこうかと思ったが、さすがに文句を言われるのは明らかなので一応持つていくことにした。部屋を出ると三人はすでに準備を済ましていた。鍵を閉めて四人で歩き出す。奈美香はかなりハイテンションである。早く海に行きたいのだろう、駆け足である。

「ガキくさ……」猪狩は聞こえないようにつぶやいた。

怜奈には聞こえたらしく、こちらを見て微笑んだ。藤井には聞こえなかったようだ。なぜなら彼も異様にハイテンションである。この四人組は奈美香と藤井がアウトドア派、猪狩と怜奈がインドア派とはつきり別れている。

「わっ」

先頭を小走りに進んでいた奈美香が階段のところで男とぶつかった。奈美香が尻もちをつく。藤井にもぶつかりそうになって、彼がよろけた。

「いたた……」

「おっと、ごめんよ。大丈夫かい？」男は奈美香に手を差し伸べる。男は二十代後半くらいだろうか、すらっとした体型で整った顔立ちだった。おそらく女性受けする顔というのはこういった顔なのだろう。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」奈美香が男の手に引かれて立ち上がる。

手を取らなくとも立てるのに、男の手を取ったのはわざとだな、と猪狩は思った。

「そう。ごめんね。海にでも行くのかい？ 気をつけて」そう言う男は右に曲がり、右手前、つまり二〇二号室に入って行った。

「ねえ、あの人がカッコ良くない？」奈美香が聞いてきた。

「知らないよ。そんなの」猪狩は奈美香の問いに答えずに、先に進んだ。

階段で三十代くらいの男とすれ違った。ロビーには二十代くらいの女性がいたし、玄関では中年の夫婦とすれ違った。巨大ホテルの影響で客が少ないと言っていたが、それでもそれなりにはやっているようだ。

どこで昼食を食べるかという話になり、相談の結果、適当に海の家を見つけて、という事になった。どこも混んでいたが、歩いて三分ほどでちょうど四人分の席が空いた店を見つけた。四人はそろって焼きそばを注文した。

昼食を終えると今日のメインイベント、海である。着替えると奈美香と藤井が一目散に海へ飛び込んでいった。

さながら小学生だと猪狩は思ったが、怜奈も嬉しそうに飛び込んでいったので、こういうものなのだと思う事にした。否、彼らを見る前から、こういうものなのだろうということにはわかっていた。

ただ、こういったことに関して自分が他人と違う感性を持っているだけだ。その事を猪狩は自覚していた。

ちなみに猪狩は海が嫌いではない。海にさえ入らなければ、であるが。泳げないわけではない。むしろ、小学校のころは水泳教室に通っていたくらいで、泳ぐのは得意だ。

ただ、泳ぐという行為に楽しみを見いだせないだけである。正確に言えば泳ぐだけではないし、泳ぐことが海水浴のメインではないように思える。

とりあえず、適当に砂場に腰を下ろして、三人を眺めていた。

「海、入らないの？」しばらくして、怜奈が海から上がって話しかけてきた。

「ああ、疲れるから。あいつらが入れって言うまでは」

「猪狩君らしいね」怜奈は微笑む。

「康平！！ あんたもこっち来なさい！！」奈美香が海から叫んで

いる。

「さっそく呼ばれたね」怜奈がもう一度微笑む。「行こっか」

「うん」猪狩が立ち上がる。「やれやれ」

それから、バナナボートを借りたり、さらにはビーチバレーのコートまで借りたりして、三人は海を満喫したようだ。猪狩もほぼ無理やり付き合わされた構図にはなったが、それでもそれなりには楽しめた。

四時近くなると、さすがに遊びつかれて、さらには海の水も冷たくなってきたのでホテルに帰ることになった。

途中のコンビニで酒を買おうという話がでた。といってもホテルは浜辺からすぐであるのに対してコンビニは一度大きい道路に出なくてはいけないので遠回りではあった。

ホテルに着いたのは五時少し前。夕食は七時からなのでまだ時間がある。四人はとりあえず自分の部屋に戻った。

猪狩はベッドにうつ伏せになった。しばらくそうして黙っていた。何もする事がないので本でも読もうかと考える。どうやら、こういった行事に本を持つてくることも本来は邪道らしい。ただ、人が勝手に決めた邪道など、どうしてもよかったので持つてきていた。

ドアをノックする音がする。

「康平、入るわよ」奈美香の声だ。

「どうした？」

「暇だから藤井の部屋でゲームしないかだって」

「別にいいよ。行こっ」

猪狩は立ち上がった。

二章 急展開する事件の展望と停滞する本来の目的について

1

猪狩は怜奈が差し出した二枚のカードを見比べた。右のカードに手をかけて怜奈の表情を伺う。左のカードに手をかけて変化を探る。猪狩は思わず舌打ちした。

怜奈は見事なポーカーフェイスだった。これが藤井ならば、おそらく表情から何らかの情報は読み取れるのだが、玲奈と奈美香だとそうはいかず、運に頼らざるを得ない。

これだから女性は怖い、そう思った。

猪狩は迷って右のカードを引き抜いた。瞬時にため息が出た。

人の不幸を喜ぶような笑みの死神の絵柄だった。

「しゃっ」怜奈がガッツポーズをする。

二枚のカードをシャッフルして怜奈の前に提示する。

今度は怜奈が、猪狩がしたように左右のカードに手をかけて感情を読み取るうとしていた。次第に怜奈の表情が曇る。猪狩もポーカーフェイスには自信があった。

結局、意を決したのか、一枚のカードを引き抜いた。

その瞬間、怜奈が歓声を上げた。

「やった！」

「昔からこれは嫌いなんだ」猪狩はつい不満を漏らした。「運の要素が強すぎる」

「あんだ、昔から運悪かったからね」奈美香が自慢げに言った。

猪狩は何か言い返したかったが言葉が出てこなかった。とりあえず、残ったジョーカーを無造作に放り投げた。

藤井の部屋では、ババ抜きや大富豪をしていた。圧倒的に奈美香が強かった。他の三人は大富豪では横一線だったが、ババ抜きでは猪狩が圧倒的に弱かった。

そのあとも、何度かゲームを続け、あっという間に時間は過ぎ七時になった。結局、猪狩が巻き返すことはできなかった。

別に修学旅行ではないので時間きっちりに行く必要もないが、トランプも飽きてきたということで食堂へ向かう事にした。

食堂は一階ロビーの左側にある。食堂に入ると何人かの客はすでに来ていて、思い思いの席についていた。

「あ、あの人」奈美香が指を差して言った。

彼女が指した方向を見ると、昼間彼女とぶつかった男が座っていた。奈美香が格好良いと言っていた男である。

彼はこちらに気づいたようでこちらに向かって微笑んだ。軽く手も振っている。奈美香はそちらに向かっていった。

「あの、ここ、いいですか？」奈美香は笑顔で聞いた。

「うん、いいよ。君たち大学生？」

「はい、矢式奈美香つています。〇大です」席に着きながら奈美香が答える。彼女は男の向かいの席に座った。

「へえ、〇大か。頭いいね。僕は真崎和哉っていうから。よろしく矢式さん」

真崎に対して、奈美香は笑顔で応対している。だが、それは作っている笑顔だと猪狩はすぐにわかった。猪狩の両親にもそうだし、彼女は基本的に目上の人間には猫を被るのだ。

三人も自己紹介をして、そのあとはもっぱら奈美香が話していた。よほど真崎のことが気に入ったらしい。確かに、見た目は良いし、話しているのを聞く限り、性格も良さそうだ。

「真崎さんって何のお仕事をしているんですか？」

「うーん、まあ一応探偵やってるけど……」真崎が歯切れ悪く言う。猪狩は話半分で周りを見ながら聞いていた。なので、探偵という聞きなれない職業（一部の読書家は聞きなれているかもしれないが、職業としてはかなり異質であるはずだ）に反応した客が何人かいたのが観察できた。特に、テーブルの向こうで食事をしている女、今日出かけるときにロビーで見た女だが、彼女が興味深そうにこちら

を見ているように思えた。

「え！？　すごいですね。やっぱり殺人事件とか解いちゃうんですか？」奈美香は目を輝かせている。

奈美香はミステリーをよく読む。それを猪狩は知っていたので、奈美香の興奮ぶりは納得できた。だが、理解はできなかった。

昼間に階段で会った男も興味深そうにこちらを見ている。これだけ大声で探偵だの殺人だの言っていれば注目を集めてしまうのは無理もないだろう。

「いや、そう思うでしょ？　だからあんまり人に言いたくないんだよね」真崎は苦笑する。「そういうのは小説の中のお話さ。警察が探偵を頼る事なんてないよ。というよりは、法律がそういうふうに作られていないからね。本来の仕事は素行調査とか浮気調査とか、あと人探しとか。地道な調査が主な仕事だよ。まあ、だいたいが浮気調査なんだけど」

「へえ、そうなんですか……」奈美香は少しがっかりしたようで、肩を落とした。

2

食事のあとは風呂に入った。小さなホテルだが、温泉が付いていてなかなか立派だった。

猪狩と藤井が湯船に入っていると、やや遠くで真崎と男が話しているのが聞こえた。たしか、階段ですれ違ったなと猪狩は思った。つまり、食事の時に興味深そうに話を聞いていた男である。

「あんた、探偵なんだって？」男が聞く。

「はい、そうですけど……えっと」

「ああ、悪い悪い。俺はフリーのライターをやってる尾崎ってなんだ。最近あまりいいネタが無くてさ」

「なるほど、で、僕が探偵だって聞いて記事になると思ったんですね？　でも本当に何もありませんよ」

「いや、そんなことはないだろう」

「いや、まあ」

真崎は一度言葉を切る。

「死体に遭遇した事は何回かありますよ」

「ほう……」

そのあとの会話は猪狩には聞くに堪えなかった。猪狩は風呂から上がることにした。藤井は少し興味深そうにしていたが、彼もすぐ上がった。

「わあ、グロ……」藤井が手を掃う仕草で言った。

「まあ、あとでもっと凄い話になるんだろうな」

「まさか、あれ以上はごめんだぜ」

「とりあえず、前隠せ」

「なんだよ。みみっちいな。男なら堂々としろよ」

藤井が猪狩のタオルを無理やり奪おうとするので、軽く頭を殴って黙らせた。

着替えを済まし更衣室から出ると、ちょうど奈美香と怜奈も女湯から出てきた。もう一人大学生くらいの女性が一緒だった。

「あ、康平。えつとねこの娘、中井夏美ちゃんっていうの」奈美香が紹介する。

「よろしく！」中井はにつこりと微笑んだ。

「どうも」猪狩はそれだけ言った。それ以外に言葉が思いつかなかった。

「よろしく。えつと、一人で来たの？」藤井が猪狩を押しつけ前に出て聞いた。

目が輝いているが、誰が見ても下心丸出しなのがわかる。

「うーんと、来たのは一人なんだけど、彼氏がここでバイトしてるから」

猪狩は藤井が一瞬うなだれたのを見逃さなかった。

それにしても従業員がいたのかと、そちらの方に興味を持った。よく考えれば、いくら小さいとはいえ、オーナー一人で何とかなる

ものではない。もちろん奥さんもいるだろうし、子供がいるかは知らないがアルバイトの一人や二人いてもおかしくないかと納得した。ただ、家族経営というのはよくあることだったし、逆にアルバイトを雇うのはコスト面ではどうなのだろうか、猪狩は少し考えた。

「じゃあ、後でね」そう言っただけで中井は奈美香と怜奈に手を振り、階段のすぐ隣の一〇一号室に入ってしまった。

「さて、これからどうする？」先ほどのショックから立ち直ったのだろうか、藤井両手を挙げて伸びをしながら聞く。

「え？ 飲むんじゃないの？」と奈美香。さも当然のように言った。「さっき買ったお酒、誰のところにしまったっけ？」怜奈が首を傾げながら言う。

「あ、俺の部屋だ。じゃあ、行くか」藤井が答えた。

藤井が先頭に立って階段を上ろうとしたとき、どこからかベルのような音が聞こえてきた。

「何？ 何の音？」怜奈がびっくりした様子で周囲を見渡した。

猪狩は耳を澄ました。どうやら左奥の部屋、一〇三号室から聞こえるようだ。

「あの部屋かな？」猪狩は指を差して言った。

「あれ、何の音かな？」

四人以外の声が聞こえてきて、全員が振り返った。そこには風呂から上がった真崎と尾崎がいた。話しかけてきたのは真崎の方である。尾崎は顔をしかめている。

「うるさいな」尾崎が部屋の方へと歩いていく。「おい、うるさいぞ！」

扉をノックするが反応がない。

「いないのかな？」怜奈が首をかしげる。「誰の部屋かな？」

「鍵はかかっています？」猪狩は聞いた。

「掛かっているぞ」尾崎はドアノブを回す仕草をしたが、ガチャガチャと音を立てるだけで、それは動かなかった。

「オーナーに言って鍵を開けてもらいましょうか。人の部屋に入る

のは気が引けるけど、これじゃあ、うるさすぎる」真崎が提案した。
「あ、私行ってきます」いち早く反応した奈美香が走っていく。
「なんか、目覚まし時計みたいだな、これ」藤井が独り言のように言った。

猪狩もそう思った。最近の電子音のものではなくて、昔ながらの鐘を打つような音だった。

「さあ、部屋には備え付けられてなかったと思うけど」猪狩は答えたが、本当に独り言だったらしく、反応は返ってこなかった。

ロビーからオーナーと奈美香が歩いてくる。

「うーん、お客さんの部屋に勝手に入ったら駄目なんですけどね……」オーナーは渋い顔をする。オーナーからするとプライバシー管理の問題があるのだろう。開けることに積極的ではないようだ。
「そんなこと言ってもこれじゃあ迷惑だろ」尾崎はかなり気が立っているようだ。

「秋山様？ どうしました？」

鍵を開ける代わりに、ドアを強くノックして、呼びかけるが反応はない。

「明けた方がいいんじゃないですか？ もし、中にいなければ、これを止めればいいですし、仮に中にいるんだったら、それはそれで深刻な事態じゃないですか」真崎が訴える。

「仕方ないですね」オーナーが扉に近づきマスターキーを差し込んだ。キーを回し、カチツという音が鳴った。

オーナーが扉を開けた。

そして、誰もが絶句した。

3

部屋に入ると奈美香の視界に真っ先に入ってくるものがあった。女性がうつ伏せに倒れているのだ。

その背中には刃物が刺さり、血がにじみ出ている。いつの間にか

音は止んでいた。

怜奈が短い悲鳴を上げた。そして、目をそらしロビーの方へ走っていった。

奈美香は一瞬も目を逸らさなかった。どうしてだろうか、足を一歩踏み出した。

「おい!？」誰かが驚いて叫んでいるようだ。おそらく猪狩だろう。しかし、彼女は足を止めない。一步、また一步。

なぜ、歩いているか自分でもわからなかった。ただ、何かを確認したかった。死んでいる事か、あるいは死んでいない事か。自分ではどうしようもないことはわかっていた。ただ、どうしようもなく確かめたかった。これは単なる好奇心だろうか。

「入らないで!!」真崎が叫び、奈美香は無理やり引き止められた。そこで奈美香は我に返って冷静になった。真崎を見上げると、彼は今までになく真剣な表情をしていた。

「まだ生きているかもしれないけど、現場は荒らさない方がいいだろう」

彼はそう言ったが、誰も生きているとは思っていないだろう。刃物は引き抜かれていないので、血が飛び散っているわけではないが、傷口からにじみ出ている血を見れば、素人目に見ても明らかだった。真崎が倒れている女性の方へ向かう。しゃがみこんで何かをしている。脈を測っているのだろう、手馴れている。

「オーナー、警察を呼んでください。救急車は、そうですね、呼んでください。でも、無理でしょう」真崎は首を横に振った。

オーナーは天を仰いだ後、ロビーへと歩いていく。死者への冥福を祈ったようにも、自分のホテルで死者が出たことでの落胆にも見えた。

真崎がテーブルへと向かう。何かに気が付いたようだ。

ポケットからハンカチを取り出した。それはたたまれてはおらず、くしゃくしゃになって入っていたようだ。意外にズボラなところもあるのだなと奈美香は思った。

「……馬鹿じゃない、私」

こんな時に一体何を考えているのだろと、思考をすぐに元に戻した。

真崎はハンカチでテーブルの上のあるものを掴み、振り向き、それを入り口に立っている者たちに見せて言った。

「鍵だ」

三章 展開する彼の思考と展開される彼女らの好奇心について

1

数十分後、ホテルに警察の第一陣が到着した。そして、一時間もたつたところには警察関係者で埋め尽くされた。被害者の部屋はもちろん、ロビーまで警官だらけとなった。

ホテルの客は、ロビーで待機するように言われている。四人はソファ―に腰掛けてじっと待っていた。

おそらく、事情聴取というものがこのあと行われるのだろう。どのようなものだろうか、奈美香は想像を巡らした。

「殺された女の人、誰？」藤井が誰に向かってでもなく言った。

「さあ、ホテルの中では何回か見たけど」猪狩が答える。

「私も知らない」奈美香は怜奈の方を見た。

彼女は気が動転しているのだろうか、藤井の問いにも反応せず、ずっと俯いている。大丈夫だろうかと心配になった。

二人の視線も彼女に集まる。彼らも不安げに怜奈を見ていた。少し休ませた方が良くかもしれないと奈美香は思い始めた。

「なあ、休ませた方が良くないか？」同じことを思ったらしく、猪狩が藤井に聞いた。

「ああ、聞いてくる」藤井は近くの警官の方へ歩いていった。

こういった行動をさせるのには藤井は適任である。彼はすぐに戻ってきた。

「部屋で休んでいいってさ。あとで話を聞きに来るって」

「そう。怜奈、大丈夫？」奈美香は怜奈の顔を覗き込むように言った。

「うん」怜奈は小さな声で答えた。

決して大丈夫には見えない。奈美香は怜奈に肩を貸そうとした。「大丈夫。一人で歩けるよ……」

怜奈は立つときこそ少しふらついたものの、危なげなく歩いていた。それを見て奈美香は一息ついた。

さて、どうしたものか。

奈美香は、先ほど起こった不可解な現象について考えていた。しかし、思考がまとまらない。

こういった事態は小説の中だけだと思っていた。だが、実際に起こってしまったのだ。そして、実際に起こってみると異常なほどの緊張感を感じる。人の死という現実が自分の身体を縛り付けている。頭もパニックに陥って、正常な判断を下すのが難しい。この中で平気で推理を展開できる名探偵たちは、やはり小説の中の人物なのだなと改めて思った。

現実に名探偵はいない。警察はいる。これは警察の仕事なのだ。そして、名探偵がいなくとも仕事を十分にこなせる人材がそろっているはずなのである。

しかし、それでも気になるものは気になるのだ。深呼吸をして落ち着こうとする。

四人は怜奈の部屋に着いた。

部屋に入ると怜奈はベッドの端まで歩いていった。彼女はそこに腰かけたが、横にはならなかった。奈美香がコップに水を注いで怜奈に渡してやると、怜奈はそれを少しずつ飲んだ。

「ありがと、奈美香」怜奈は奈美香に微笑む。

若干の無理があるように思えたが、少し良くなったようだ。

奈美香は部屋に備え付けてある椅子に座った。

「無理するなよ」藤井が心配そうに声をかける。

彼は座る場所を求めて窓際まで行ってソファに座った。

「寝てた方がいい」座る場所がなく、入り口付近の壁にもたれていた猪狩が言った。

そういわれて彼女は少し迷ったようだが、横になった。

その時ドアがノックされた。猪狩が一番近かったので彼がドアを開けた。真崎だった。

「やあ。新川さん、大丈夫かい？」

「ええ、ありがとうございます」 怜奈は上半身だけを起こした。

「無理しないでよ。えっとね、今、下の一〇五号室で事情聴取をやっているんだ。あとは君たちだけだよ。そのうち警察が呼びに来ると思うけど。……まあ、新川さんは無理しなくてもいいんじゃないかな。じゃあ、お大事にね」 そう言っただけで微笑むと真崎は部屋から出て行った。

「真崎さんって良い人ね。こういう気遣いができる人っていいわあ」 奈美香はわざとらしく猪狩の方を見て言った。

真崎の対応は嬉しかった。自分に向けられたものではないが、好意的な対応だ。猪狩の方を見て言ったのは彼の無愛想に対する嫌味だった。だが、猪狩は何の反応も示さなかった。少し腹立たしかった。

彼は少し無愛想すぎる。「少し」と「すぎる」が同時に存在する文章はいささか適切でないように思えるが、彼を表すのにはあながち間違いではない。彼は決して、不親切だったり、性格が悪いわけではないのだ。ただ、「おとなしい」を通り越して「寡黙」だし、その分、勘違いされがちだ。

（それさえ直ってくれさえすればいいのに……）

だが、直ったところで、「誰が」「どう」良いのだろうか。なぜそう考えたのだろうか。

結局、奈美香は考えるのを止めた。

しばらくすると警官がやってきた。どなたからでも、ということ
で猪狩が最初に行く事になった。

2

猪狩が一〇五号室に入ると、警官が二人いた。一人は三十代くらいで背が高い。がっちりとした体格で、もう一人は五十代くらいだろうか。若干白髪混じりで小柄だ。

二人とも椅子に座っている。部屋に椅子はひとつしかないの、どこからか持って来たのだろう。さすがにソファで事情聴取をするのもおかしいし、納得できた。

「すいませんね、お手数をおかけします。道警の大竹と申します」
若い方の男が愛想よく言った。

「どうも」猪狩はそれだけ言った。こういった「仕事の顔」が猪狩は苦手だった。

「どうぞおかけになってください」猪狩は言われた通りに椅子に座った。

「ええと、まず、殺された被害者と面識はありましたか？」大竹が言う。

どうやら若い大竹の方が話を進めるらしい。

「いえ、ないと思います」

「思います、と言うと？」

「顔を見てないんで。名前も顔も知りません」

「ああ、失礼しました。」そう言う大竹はテーブルの上のファイルから写真を取り出す。「こちらです。秋山美冬さんというのが」

猪狩は写真を見た。若い女性の顔が写っている。ホテルに来てから何度か見た顔だ。海に行くときにロビーで見かけたし、夕食のときにもいた。

「いえ、ここでは何度か見ましたけど話もしていません」

「そうですね。では、事件が発覚したときの事を教えていただけますか？ 他の方の話だとあなたもいたそうですが」

「えっと、風呂から上がった部屋に戻ろうとしたら、目覚まし時計みたいな音が聞こえたんです。で、たしか尾崎さんでしたっけ？ 記者の人が扉をノックしたんですけど反応がなくて。うるさいから鍵を開けて中の様子を見ようって事になって、オーナーが鍵を持ってきたんです。あの音って何だったんですか？」

「あなたの言うとおり、目覚まし時計ですね。隠されていました。」

いろいろと細工がされているようで、今調べています……」大竹は言葉を切った。

喋りすぎたということなのか、もう一人の刑事に睨まれている。細工がされていたということは、その時計が密室に必要なだったという事だろうか。

「鍵を開けたのはオーナーでしたか？」大竹は咳払いをして質問を再開した。

「え？ たしかそうでしたけど」

「その前に鍵がかかっているのを確認しましたか？」
「いえ……」

なるほど、警察は本当はあの部屋が密室ではなかったと考えているのだろう。しかし、たしか部屋を空けようとしたのは尾崎だったはずだ。二人が共犯でないかぎりそれはない。そもそも、本当に密室だったのだろうか。猪狩は自分がいつもより積極的な思考になっていることに気づいた。

「窓の鍵ってかかっていたましたか？」猪狩は聞いてみた。

「……かかっていたましたよ」大竹は少し渋い顔をした。

あまりいろいろ質問するなということだろうか。年配の刑事の顔色を窺っている。

だが、猪狩にはまだ一つ気になることがあった。

「あの、部屋に入った時には音が止んでいたんです」

「ああ、そうですね。普通の目覚まし時計と同じみたいです。時間が経つと止まります。ただ、しばらくするとまた鳴るようになっていきます」この質問にはためらいなく答えてくれた。

「ああ、なるほど」

細工がされているというので気になったが、どうやら音が止んだこと自体には関係がないようだ。肩すかしをくらってしまった。

「では最後に今日の行動について教えて下さい。夕方以降でいいですよ。」

「えっと、たしか海から帰ってきて七時まで友達と四人でトランプ

をしていました。それから夕食を食べて……七時半過ぎくらいから八時半くらいまでは自分の部屋にいました。それから風呂に入って出てきたところで終わりです」聞かれている事を答えているだけだが、いつもより饒舌だと自己分析する。

大竹はメモを取っている。年配の刑事はずっと考え込んだ表情だ。「もういいですよ。ありがとうございます」

3

怜奈の顔色はだいぶ良くなったようだ。自分もさっきより落ち着いてきた。奈美香はそう思い、ずっと思っていた事を口にしてみた。

「誰がやったのかしら？」

「え？」二人は驚いたようだ。

「ああ、そういう話になるの？」藤井は苦笑いする。

「私もちよつと気になる……」

怜奈も驚きはしたようだが、興味をそそられたようである。やはり、女子の方が強い世の中になったのだろうか考える。ちょうど猪狩が入ってきた。

「次、誰が行く？」猪狩が聞いてきた。

「じゃ、俺が」藤井が立ち上がり、部屋から出て行った。

「誰がやったと思う？」奈美香は同じことを猪狩に尋ねた。

「さあ、それよりどうやってやったか気になる」そう言いながら猪狩は窓際まで歩いてソファに腰かけた。

「あ、たしかに」

「どういうこと？」ベッドの上で怜奈が首を傾げた。

彼女は鍵を見えないことを奈美香は思い出した。

「ああ、テーブルの上に鍵が置いてあったのよ」奈美香が説明する。

「……密室？」

彼女はしばらく考えてから言った。彼女にとっては馴染みのない

言葉で、すぐには言葉が出てこなかったのだろう。彼女は奈美香と違つてミステリー小説を読まない。

「そういうこと」

「窓も？」

「あ」それはすっかり忘れていた。全く見ていなかった。

「かけてあつたよ」猪狩が答える。

「本当に？」奈美香は猪狩に尋ねる。

「知らない。警察が言っていたただけだから」猪狩が窓を見ながら言つた。

「本当に密室ね」奈美香がつぶやく。

奈美香も窓際まで歩いて、窓の力ギを見た。一般的な三日月状の円盤を回転させるタイプだった。おそらくどの部屋でも同じだろう。「そうでもないだろ。鍵が二つあればいいんだから」

「あ、そうか」

少し思考が偏っていると奈美香は感じ、落ち着くために深呼吸した。

「でも普通は部屋の鍵つて一つじゃない？ あとで伯父さんに聞いてみるけど」

たしかにホテルの鍵が二つ以上あるとは聞いた事がない。あとはマスターキーだけだろう。

「じゃあ、可能性は二つね。みんなの目を盗んでカウンターからマスターキーを盗んだか、外から何らかの方法で窓かドアの鍵を閉めたか」

「もう一つ、あの時、まだ犯人が中にいた」

「ありえる？」怜奈が首を傾げる。

「さあ、ベッドの下とか、クローゼットの中とか。でも可能性は低いよ」

「なんで？」

「警察が来るまで俺がずっと見てた。ロビーからだけ」

「うーん。じゃあ、やっぱりキーを盗んだか、外から鍵をかけたか

ね。でも、カウンターからキーを盗むのってかなりハイリスクじゃない？ 戻さなきゃいけないし」奈美香は腕を組んで言った。
「こんなところで殺すこと自体がハイリスクだ」猪狩はそう言うのと立ち上がった。

彼はそのまま部屋の出口へと向かっていく。

「ちよつと、どこ行くのよ？」

「部屋。なんか馬鹿馬鹿しくなってきた。だって警察の仕事だろ、これ」そのまま部屋を出て行った。

「つまらない男……」奈美香は猪狩の後ろ姿を睨みながら呟いた。

「あれ、康平は？」入れ替わりで藤井が戻ってきた。

「部屋に戻っちゃった」怜奈が説明する。「さっきまで、密室の話で盛り上がってたんだけど」

「なんだ、俺だけ仲間はずれ？」

4

奈美香は警察の事情聴取を終えると一度部屋に戻った。わかったことは少ない。殺されたのは秋山美冬という女性でOLということだけだった。

一人で考えに耽っていたが、どうにも落ち着いていられずに、部屋を出た。

階段を下りてすぐ左の部屋、一〇一号室の扉をノックした。しばらくの間があり、中井夏美が顔を出す。

「やつほ」奈美香は笑顔で小さく手を振った。

「ああ、奈美香ちゃん。入って入って」中井も笑顔で返す。

奈美香と中井は今日知り合ったばかりである。中井はH大の二年生である。O大とH大は決して近くはないが、同じ地域にある。電車なら一時間もかからない。離れた土地で不思議な縁を感じた。

先に話しかけてきたのは中井の方で、話していくうちに互いにミステリー好きという事がわかって、意気投合したという経緯である。

「大変な事になったね」中井にあてがわれた椅子に座ると奈美香は話を切り出した。中井自身はベッドの端に腰かけている。

「うーん、でも私見てないからなあ。奈美香ちゃん、見たんでしょ？」

「うん、ちよっときついわね」奈美香は苦笑いする。思い出すと寒気がしてきた。

「私駄目だわあ、きつと。こういうのは本の中だけにしてよ、って感じ」

彼女は勢いよくベッドに倒れこんだ。バフツとベッドが音を立てた。

「事件のとき、何してたの？」奈美香は思い切って聞いてみることにした。実はこれを確認しに来たのだ。中井ならば嫌悪感を抱かずに答えてくれるだろう。

「なに、アリバイ確認？ うわあ、事件解決する気なんだあ？」中井はすぐさま反応して起き上がると、目を丸くした。「いいよいいよ。どうせ私やってないから。えつとね……いつ？」

「夕食のときはいた気がするのよね、殺された女の人。だから、その後」

「えつとね」中井の視線は天井を向いている。思い出そうとしていくようだ。「しばらくは、食堂にいたかな？ 貴裕としばらく話して、仕事があるからって、彼、厨房に引っ込んで行っちゃったから部屋に戻って。何時頃だったかなあ？ 覚えてないや。そのあとすぐお風呂に行ったよ」

貴裕とはここで働いている中井の彼氏の事だろうと奈美香は推測した。

「ふーん、じゃあ、彼には一部アリバイがあるのね。オーナーも一緒かしら？ その辺は怜奈が聞いているかしら」

「がんばってね」

「何の得にもならないけどね。好奇心って嫌だわ。わかってるのに止まらないもの」

奈美香は微笑んだ。

5

怜奈はカウンターの奥の部屋にいた。事務室のようなところである。オーナーの林は、机に向かつてはいるが、ただ、頭を抱えるばかりで、特に作業は行っていないかった。

伯母の凜子も椅子に座ってそわそわしている。

その奥では若い男が部屋の隅の長ソファに座ってペットボトルのお茶を飲んでいた。

「参ったよ。ただでさえ経営が厳しいのに、殺人事件があつたなんて広まったらどうしようもないよ」林はため息をつく。苦笑いすらできないようだ。

「伯父さん、大変ですね……」

「警察にもいろいろ聞かれるし、冗談じゃないなあ。アリバイとか聞かれるしね」

怜奈はしめた、と思った。一番聞きづらかったことを自ら話してくれた。もっとも、怜奈は自分の伯父が人を殺したとは全く思っていない。

「ずっとここで仕事してたからさ。誰も見てないんだよね。あ、高石君が何度か来たっけ？」

林は椅子に座ったまま首だけ後ろを向いて高石に同意を求めた。

怜奈は彼が中井の彼氏だろうと思った。

「はい」とだけ高石は答えた。

「母さんは、どうだったっけ？」

「それこそ高石君と夕食の後片付けでしたよ。ねえ？」

「はい」高石は再びそれだけ答えた。おとなしい性格なのかもしれない。

「もう、早く犯人を捕まえて欲しいよ。でないと商売あがったりだよ」

「でも、どうやって鍵をかけたんですかね？　それがわからないと警察も動けませんよね」

「さあ？　でも、小説とかでよくあるじゃないか」

「マスターキーとか、盗られた形跡ありません？」

「ないよ。ほら、それ」

林が壁を指差した。金庫のようなものが壁に取り付けられており、番号式の鍵がつけられていた。あの中に鍵が入っているようだ。

「あの番号、俺しか知らないから」

6

猪狩は自分の部屋に戻るところだった。階段を上っている途中で、話し声が聞こえてきて足を止めた。

「で、探偵としてはどう考えているわけだい？」真崎の部屋の前で尾崎が真崎に話しかけている。

尾崎は腕を組んで、ニヤニヤと、何やら楽しそうに話しているが、真崎の方は、頭をかきながら苦笑している。

盗み聞きするのもどうかと思ったが、そのまま聞くことにした。何か事件について聞けるのではないかという期待があった。事件があつてから確実に思考が変化している。だが、理由はわからなかった。

「なにも。僕の仕事じゃないですよ。」真崎は素っ気ないが、微笑んでいるようにも見えた。

「そんなこと言わずにさあ」

「何を聞きたいんですか？」真崎はため息をついて苦笑した。

「もちろん、犯人は誰か？」尾崎は指を立てて言った。「でも情報が少ないわな。とりあえず、密室のトリックかな？」

「さあ？　でも方法はいくらでもありますよ。誰にでもできます。僕にもアリバイはないですしね。あなたにもないでしょう？」

「まあな、自分の部屋で仕事をしていたからな」

「とにかく情報が少なすぎます。そして情報が増えることもないでしょう。僕は警察関係者じゃない。むしろ容疑者だ」

「まあ、そうだな」尾崎は舌打ちした。「悪かったな、時間食わせて」

そして彼は自分の部屋に戻ろうとする。

「そういえば」真崎がそう言い、尾崎が足を止めた。

「中年の夫婦、見ませんね」真崎が呟いた。

四章 集束する各自の調査結果と収束しない議論の結論について

1

すでに十二時近かった。買ってきた酒も無駄になってしまった。

もし、何事もなく飲んでいたらまだ起きていただろうが、そんな気分ではなく、みんな寝てしまったようだ。しかし、奈美香は密室の謎が気になり、目が冴えていた。色々な可能性がある。けれども、どれも弱い。猪狩なら何か思いついているだろうかと思った。彼は昔から観察力や閃きが良かった。誰も気がつかないところに気がついたり、疑問を感じたりしていた。その度に「なんで、そんなこと気にするの？」とか「別にどうでもいいじゃん」などとまわり言われていたから自然と喋らない事を覚えたのかもしれない。

そう、昔はもつと喋る少年だったのだ。

彼のところに行こうか考えたが、もう寝ているだろうし、あまり興味がなさそうだったので無駄だろう。どちらにせよ今日はもう遅い。明日にしようと思ったとき、ふと真崎の事を思いついた。

「真崎さんなら、何か思いついているかも……」

まだ起きているだろうか、少し話を聞いてみたいと思った。そう決心して、奈美香は部屋を出た。

真崎の部屋は二〇二号室だ。寝ていても起こしてしまわないように軽くノックするが反応はなかった。

「寝ちゃったかな？」

無理もないと諦めて、部屋に戻ろうとしたところだった。

「あれ、どうしたの？」真崎が階段を上ってきた。

手には缶のコーラを持っている。それを買に行っていたようだ。「あの、少しお話がしたくて。事件の事なんですけど……」奈美香は上目遣いで話す。

「うーん、前も言ったけど探偵ってそういうことはしないからなあ

……」まいったな、というように頭を掻いている。

「でも、何かは考えていますよね？」

「いや、まあ。うーん、いいよ、わかった。けど、明日にしよう。あんな事があって僕も眠いんだよ」そう言って真崎は欠伸をする。

「わかりました。こんな遅くにすいませんでした」奈美香は頭を下げた。

「いいよ、じゃあ、おやすみ」真崎は手を振って自分の部屋の扉を開けた。

「おやすみなさい」奈美香はもう一度頭を下げた。

2

結局、奈美香はなかなか寝付けなかった。そのせいで寝坊してしまった。怜奈に起こされて食堂に行ったときには、もうほとんどの人が来ていた。

猪狩、藤井、怜奈と中井もいる。彼女は従業員と思われる若い男と話している。彼が貴裕だろうと奈美香は判断した。真崎と尾崎は向かい合わせで話をしている。事件のことだろう。そのほかには中年の夫婦だけである。彼らとはなかなか接点が持てなかった。

「おはよう」奈美香は怜奈の隣に座る。

挨拶を交わしたがそれきりで、口数は少なかった。無理もない話だが、誰もが本調子ではないようだ。

「そつえば、今日、真崎さんと事件の話をするんだけど」奈美香は思い出した事を言った。

「お、いいな、それ」藤井が食いついてきた。

「面白そうね」怜奈も興味を持ったようだ。

「帰るんじゃないかったのか？」猪狩だけは興味がなさそうである。

「いいじゃない、別に一日中話をするわけじゃないわよ。今日中には帰るわよ」

「ならいい」猪狩は黙って食事に手を付けた。

しばらくして、大竹と年配の刑事、竹口というらしい、その二人がやってきた。竹口が全員に向かって話し出した。

「皆さんおはようございます。今日帰る方もいらっしやると思いますが、それは構わないのですが、お聞きしたい事がある場合には連絡いたしますので。また、何かお気づきの点があれば遠慮なくおっしゃってください。以上です。失礼します。」

そう言って二人は去っていった。

奈美香はコップに水を注ぎに行くついでに真崎のところまで行った。真崎と、尾崎までが彼女を見た。

「あの、昨日のことなんですけど」

「ああ、いいよ。朝食が終わったら僕の部屋に来てくれるかい？彼らも来るんだろう？」

「はい、お願いします！」奈美香は笑顔を見せる。

3

奈美香は真崎の部屋をノックした。

しばらくして真崎が扉を開けた。「やあ、どうぞ」

「失礼しまーす」

四人は真崎の部屋に入る。すでに荷物が整理され綺麗に片付いていた。

「真崎さんも今日帰るんですか？」怜奈が聞いた。

「ああ、仕事があるからね。」真崎は椅子に腰掛ける。四人はベツドの端に腰掛けた。「まったく、とんだ一人旅だ。で、何から聞きたいんだい？」

「真崎さんはこの事件どうお考えですか？」奈美香は単刀直入に聞いた。

「どう、ね……」真崎は考える仕草をする。「たぶん内部犯だろうね。外の誰かがあの状況を作ったとは考えにくい」

四人は頷く。

「あと分かっているのは、誰にもアリバイがないって事かな」

「そうですか？」 奈美香は首をかしげる。

「被害者が発見されたのは九時過ぎ、僕が最後に見たのは食事のときだから七時半くらい。彼女、お風呂に来た？」

「いえ、来てないです。」 怜奈が答える。「私たち、八時過ぎにお風呂に入りました。」

「お風呂に来たかが確かな証拠にはならないけど、まあ、だいたい七時半から、三十分から一時間の間に彼女は殺されたと考えていいよね。警察が死亡推定時刻を教えてくださいれば早いんだけど。その間、何してた？」

「えっと、夕食が終わってからには怜奈と一緒にいたよね？」 奈美香は怜奈に確認した。

「うん」 怜奈は頷いた。

「俺は部屋にいたかなあ？ 八時半くらいに風呂に入ったけど」 藤井が首を傾げながら言う。「俺もです」 猪狩は頷かずに答えた。

「みんな、同じようなものだと思うよ。僕も自分の部屋にいたからほら、アリバイなんて大したもの持ってないよ」

「それじゃあ、誰にでもできるって事ですか？」 奈美香は腕を組んで考える。

「そう。だからアリバイからのアプローチは無意味ってこと。煙草吸っていい？」 真崎はポケットから煙草を取り出す。

「じゃあ、密室のトリックから、それができた人物を割り出すしかないですね」

「もう一つあるよ」

「動機、ですね。けどそれは私たちにはわかりません」

「賢いね、矢式さん」 真崎は煙草に火をつけた。「僕らが考える必要もないし、考える余地もないんだけど、唯一余地があるとしたら、密室のトリックだろうね。これも必要はないけどね」

「そもそもどうやって部屋に入ったか」と猪狩。

「少なくとも窓ではないわね。さすがに被害者も悲鳴を上げるなり

したと思う。だから、外部犯説も同じ理由で、なし。内部の人間、つまり、従業員かホテルの客なら何らかの理由をつければ知り合いじゃなくても警戒されずに部屋に入れたんじゃない？」

「親しい人物なら簡単だけど、そういう人が客に中にいた様には見えなかったし、その辺のつながりは警察が調べるだろうね。動機はどうやったって僕らにはわからない。話を密室に戻そう」

「どんな方法があると思いますか？」藤井が聞いた。

彼は先ほどから腕を組んで難しそうに考え込んでいるように黙っていた。だが、おそらく何も思い浮かんではいないのだろう。

議論はもっぱら奈美香と真崎、そして猪狩が少し口を出すだけで、ほとんど二人で進行している。

「色々あるよ。一番簡単なのはカウンターのマスターキーを使った。良く考えたらこの鍵があるんだから密室じゃないね」真崎が笑いながら言う。「オーナーの目を盗めば、誰でもできる」

「それは、無理ですよ」怜奈が反論した。「伯父さんに聞いたんですけど、あ、オーナーの事です。マスターキーは持ち出されないように鍵をかけて保管しているんです。番号式でオーナーしか知らないそうです」

「君、オーナーの姪っ子なんだ？　へえ……じゃあ、この方法はオーナーしかできないね」

真崎は一本目の煙草を灰皿でもみ消した。

「でも、伯父さんにはアリバイがあるんです」

「いつの間に調べたんだよ？」藤井は目を丸くしている。

「気になったから昨日のうちに調べたの。えっへん」怜奈は笑顔を見せる。「で、アリバイなんですけど伯父さんはその間ずっと事務室で仕事をしていたそうです。アルバイトの高石君が証言しています。あ、けど、彼は伯母さんと一緒に夕食の片付けをしていたそうです、事務室ですっと一緒にいたわけじゃないみたいなんですよね」「用意がいいね新川さん。他の人のアリバイとかはわかる？」

真崎は二本目の煙草に火をつけた。どうやら、かなり吸う方らし

い。

「いえ、伯父さんたちの事しかわかりませんでした。」

「夏美は食堂にいたって言っていたわ。高石君とお話して、それからお風呂に入ってたって言ってるから。たぶん高石君はそのあとずっと夕食の後片付けをしていたのね。だから、アリバイは間違いないと思う。オーナーについても、高石君が見かけているし、奥さんも高石君と一緒にいた。オーナー夫妻も間違いないんじゃないかしら」
奈美香は説明した。

「オーナーのアリバイは怪しいけど、まあ、仕方ないか。オーナーの奥さんとバイトの子には犯行は無理だね。アリバイトリックをつかえば可能かもしれないけど、今はおいておこう。そもそもアリバイトリックなんて口で言うほど簡単じゃないからね。

で、夏美って子のアリバイはちよつと薄いな。食堂から風呂までの間が曖昧だ。そうそう、尾崎さんは部屋で仕事をしていたって言うっていた。やっぱり、みんな大したアリバイは持っていないね。君たちはどう思う？」

「さっぱりッス」藤井は両手を挙げてお手上げのポーズをする。

「うーん……」怜奈は考え込んでいるようだが答えは出せないでいるようだ。

「マスターキーが使えないとなると、鍵なしで外から鍵をかけたことになります。もしくは鍵はかかっていなかった」奈美香はとおきの考えを言った。

「ああ、それ面白いね。ということは、鍵がかかっていることを確認した尾崎さんと鍵を開けたオーナーは共犯だね」

「オーナーは確実に鍵を回していた」猪狩が否定した。

奈美香は舌打ちをする。猪狩にとっておきを簡単に覆されてしまった。

「うーん、駄目か……」

「やっぱり鍵はかかっていただろうね。じゃあ、どうやってかけたかだね」

「色々方法がありますね。よくあるのは糸とかワイヤーを使う方法ですけど」

それは、もちろん小説の中の話である。実際に「よくある」かは知らない。むしろ、滅多にないのではないかと奈美香は思った。

「そんな隙間あったか？」藤井が尋ねる。

「窓なら？ レバーに糸を巻きつけて上の換気扇から外に出して、引っ張ればレバーが上がって鍵が閉まると思うんだけど」

「糸じゃ換気扇のところが摩擦で切れる。ワイヤーだと傷が付くと思う。釣り糸なんかだと無難かもしれないけど、そもそもうまくいくかどうか」またも、猪狩が否定する。

奈美香は彼を睨んだ。揚げ足ばかり取る猪狩に苛々してきた。

「あんた否定ばかりしないで何か自分で意見出さないよ！」
「いや、特にない」猪狩は素っ気なく答える。

奈美香は舌打ちしてもう一度睨む。物事を否定できるほど考えられるのなら、必ず、何か思い浮かんでいるだろう。だが、彼はそれをしない。彼女にはそれが不愉快だった。

「まあ、まあ」真崎がなだめた。「それなら、機械を使った方が良い気がするな。僕はよく知らないけど結構小さなサイズになると思うよ」

「でも、それなら回収しなきゃいけないですよね？」

「うん、問題はそこだね。誰にも気づかれずに回収しなきゃいけない。あそこにいたのは僕ら以外では尾崎さんとオーナーだね。けど、そんな素振りにはなかったと思うよ」

「あの時、まだ犯人がいたとか？」藤井が思いついたように言う。

「それは昨日も出たわよ。康平がずっと見ていたから、それはないわよ」奈美香はきっぱりと否定した。

昨日出た案ではあったが、ちょうど藤井が事情聴取に行っているときだったので、彼は知らなかったのだ。藤井はがっかりしたようだ。それなりに自信があったらしい。

「うーん、そろそろネタ切れかな？」真崎の煙草はすでに五本目に

なっていた。

「今のところそれらしいのはワイヤーで窓の鍵をかけたか、機械で扉の鍵をかけたか。前者なら犯人は一階の部屋の人ですよ。一度外に出ても、入り口から入ったら鈴の音でわかるから、自分の部屋の窓からホテルに入るしかないわ。後者なら、もちろん一階の人も考えられるけど、尾崎さん……」

「か、ここにいる五人」真崎はイタズラっぽく笑う。

藤井と怜奈は驚いたが、奈美香は微笑み返す。予想できた答えだったからだ。猪狩は相変わらず無反応だ。

「一階の部屋は誰がいたかな？」

「えっと夏美ちゃんと……」奈美香は考えたが思い浮かばなかった。武井さん夫婦」怜奈が代わりに答える。

これも調べておいたのだろう。何度か見かけた中年夫婦の事だろう。

「ま、どっちにしてもちよつと弱いね。でも、そろそろお開きかな」
「そうですね。ありがとうございました。」奈美香は頭を下げる。

四人は立ち上がり部屋から出て行こうとした。

「君の意見を聞いてないね。猪狩君」

また真崎は煙草をふかしていた。

「秋山美冬さんって、変わった名前ですね。秋なのに、冬です」

奈美香は呆気にとられた。怜奈と藤井も同じように口を開けている。真崎だけが微笑んでいた。

「事件については？」

「さあ……わかりません。何かを忘れているのか、答えは出ていません」

そのまま猪狩は出て行った。

五章 移動する彼らの諦念と移行する彼の論究について

1

「結局分からなかったわね」帰りの電車の中で奈美香が言った。

真崎もS市に住んでいるらしいが、車で来ていた。なので帰りも猪狩、藤井、奈美香、怜奈と来たときの四人となった。

ボックス席に座り、男性二人が進行方向とは逆の席に着いた。猪狩が窓側だった。こういつたことはたいいてい男性が譲歩しなくてはならない。男女平等とはまた違った概念だ。男尊女卑のリバウンドかもしれない。だが、別に猪狩に不満はなかった。

猪狩は窓の棧に肘をついてずっと窓から海を眺めていた。だが、風景は脳内に響いてこなかった。

「ま、俺ら素人だし。警察に任せるしかなかったんだよ」藤井が言う。

「けど、悔しいね。あつ、ごめん不謹慎だね、これ」怜奈は眉を顰めた。人が死んでいるのを思い出したのだろう。

「けど、まだ詰めれそうじゃない？ とりあえず、尾崎さんは犯人じゃないと思うの」奈美香が言い出した。

怜奈と藤井は奈美香に注目した。猪狩は窓を向いたまま聞くことにした。

「二階にいたからか？」

「厳密に言うところとちょっと違うけど。あの時間みんな自分の部屋にいた。だから、犯人は堂々とドアから入った。こういう口実を使ったかはわからないけど。とりあえず疑いを持たれずに部屋に入った。そういう点では尾崎さんにもできる。」

けど彼の場合、密室にする方法が思い浮かばないのよ。真崎さんが言ったように機械を使ったとしても回収しなきゃいけないし。やっぱり一階にいた人の方がリスクは低いと思うの」

「じゃあ、夏美ちゃんか武井さんたち？　そういえばあの夫婦のと全然わからないよね」

「そう。彼らが一番怪しい。けど一番怪しまれるのに殺したりするかしら？」

「それはミステリーの読みすぎなんじゃねえの？　やっぱ一番怪しいやつが犯人でいいとおもっけどなあ」

「そもそも、怪しいって言っても、私たちと接点がなかったってだけだよ。もしかしたら、他の人たちとは交流があったかも」

「うーん……」

「オーナー夫妻のアリバイには高石が絡んでいる」猪狩は口を開いた。

三人は飛び上がりそうになった。

「うわっ！　びっくりしたお前聞いてたのかよ」藤井が胸に手を当てている。よほど驚いたようだ。

驚きすぎだろうと猪狩は内心で呆れた。

「何？　じゃあ、康平はオーナー夫妻が高石君と共犯だって言いたいの？　どっちが？」奈美香は顔を顰めながら聞いた。

「そうは言ってない。それに共犯じゃなくても方法があるかもしれない」

「アリバイトリック？　何かあるかしら？」

「さあ？　それは知らない」

実際、何も考えていなかった。考える必要もないと思ったのだ。そう言って、また窓の方に視線を戻した。

奈美香の舌打ちが聞こえた。

最近、奈美香の舌打ちが多くなったように思える。さらに言うならばその対象は自分だけのようだ。女性の舌打ちは印象が悪くなるし、自分に対してのみ行われるというのも気に入らない。自重してほしいと思った。

三人で議論が再開されたようだが、猪狩は今度は聞いていなかった。自分の思考を脳内で循環させることに努めた。

結局、議論はまとまらなかったようだ。

やがてS駅に着いた。駅の時計は四時ちょうどを指していた。帰路に着くと、まず怜奈と別れた。彼女だけ方向が違うのだ。そして地下鉄に乗り換えて、二つ目の駅で藤井が降りた。その次の駅で猪狩と奈美香は降りた。歩いて二十分ほどで二人の住む住宅街である。自転車だともっと早いのだが、今回は荷物が多く自転車に乗せられなかったので、歩いて来ていた。

猪狩は黙っていた。珍しく奈美香も黙っていた。彼女は事件について考えているようだった。

実は、猪狩も事件について考えていた。好奇心とも違う何かが自身を動かしているのだ。

おそらく、とんちのきいた街頭のポスターと同じだ。たいてい、意味がわかって面白くない。さらに悪いことに、解いたところで何の利点もない。けれど、目の前に提示されると、少し考え込んでしまう。好奇心などという大それたものではない。未解決のまま放置されているのが気に入らない、その程度のものだ。

何か忘れている。そう真崎に言った。だが、そうではないような気がしていた。

何かを間違えているのか。そちらの方が少ししくりくる。どちらでも同じだろうか。

なぜ、密室なのか。まず、その命題を解かなくてはいけない。

この場合、密室は単に不可能を示しているだけだ。誰にもできない、だから自分にもできない。アリバイを確保できないから、そうせざるを得なかっただけだ。

非常に幼稚な考えだ。コストパフォーマンスが低い。他にも疑問点はある。

あのホテルでなくてはいけなかったのか。通り魔で殺してはいけなかったのか。

自殺に見せかけることはできなかったのか。

この命題を後回しにしたところで、肝心の問題が残っている。

どうやって密室にしたのだろうか。これがわからない限り、犯人の思う壺ということになる。

何かを見落としているのだろうか。

うつ伏せの死体、刺さったナイフ。滲み出る血。テーブルの上。

そして、そこにあつた鍵。

被害者を最後に見たのはいつだったか。

夕食のとき？

時計は？ 隠してあつたと言っていた。

起きた事象をすべて思い出す。穴だらけの方程式にそれらをつぎ込んで、計算する。

条件式も設定して、無駄をそぎ落としていく。

ああ、

そうか。

猪狩は笑ってしまった。これは嘲笑だ。

「うわっ！ びっくりした……どうしたの、急に？」 奈美香が睨んでいる。

だが、全く気にならなかった。それどころではなかった。自分自身に呆れて、笑わずにはいられなかった。

「いや、別に」 猪狩はそう答えた。

だが、猪狩は笑いを堪えることができなかった。

「何よ、気持ち悪い」

「いや、別に」 猪狩は繰り返した。

すでに、猪狩たちの家に近いところまで来ていた。スーパーや書店、ホームセンターなどが建つ大きな通りから、内側に入り、こじんまりとした住宅地へと到着する。

やがて、奈美香の家に着いた。

「じゃあ、また」奈美香が手を挙げる。

「ああ」

それだけ言っただけで立ち去ろうとした。

「あんた、なんか思いついたの？」

奈美香が言ったので、足を止めた。

「いや、別に」何度目かの同じ返答を猪狩はした。

「ああ、そう。じゃ」

奈美香は納得していないようで、訝しげに猪狩を見て首を傾げたが、結局家の中へと入っていった。

猪狩の家はそこから五分ほどだった。

砂利が敷き詰められた家の前には今は何もない。車がないということは、父は休日出勤しているらしい。最近は厚生労働省がうるさいらしいが、それでも中小企業に勤める父は休日出勤をやめる気はないらしい。

家の横には小さな家庭菜園があり、その手前には軽自動車が止まっている。母はいるようだ。

「ただいま」

「お帰り」

リビングに入ると母の涼子が台所から顔を出した。

猪狩はとりあえず荷物をリビングの端に下ろし、ソファに座りこんだ。

「どうだった？」

涼子は夕食の支度の途中だったらしく、エプロン姿で包丁を持っていた。たまりリビングに入ってきた。自然と刃先が猪狩の方を向く。

「包丁持ったまま来るな」

「いいじゃない、刺すわけじゃないんだから」

そう言いながら涼子は包丁を突き出して刺す真似をした。猪狩が睨むと彼女は肩を竦めた。

「で、どうだったの？」

「散々だった」

猪狩が言うと、涼子はため息をついた。

「あんたねえ、そもそも楽しもうとしなかったでしょう？」

「いや。楽しかったよ。たぶん。そっちは」

涼子は首を傾げる。

「いや、あんた散々だったって……」

「ねえ、タウンページある？」

「は？ あるけど、電話の下に」

「あ、そう」

猪狩は電話台の戸を開けて、電話帳を取り出した。

「何でこんな子に育ったのかねえ……」

涼子は再びため息をついた。

2

海から帰って来た翌日の月曜日、奈美香は猪狩の家に向かっていった。彼が何か思いついたように思えてならなかったからだ。

奈美香にはまだわからない。いくつも可能性を挙げては消去。その繰り返しである。答えにはたどり着きそうにもない。

条件が足りないのか、もしくは間違っているのか。

動機について調べる力がないのが痛い。おそらく、警察の捜査とはそこが出発点のはずだ。それができないのは、ハンディキャップとして大きい。

そのうちに、警察が動機から犯人を割り出すかもしれない。

しかし、まだ先のはずだ。動機がわかってても手法はまだわからないだろう。

だが、何か動かぬ証拠を見つけるかもしれない。犯人の毛髪が見つかるともしれない。被害者の爪に犯人の皮膚が付着しているかもしれない。そうなれば密室のトリックなど意味を成さないだろう。そう考えると自分達は情報が圧倒的に少ないし、やっている事も無

意味に思えてきた。

いや、無意味は百も承知だった。観測された不合理が気に入らないだけの事だった。

そう考えているうちに猪狩の家に着いた。インターフォンを鳴らす。

「はい」女の声だ。おそらく母の涼子だろう。

「あ、おはようございます。矢式です」いつもよりも高い声で言う。涼子と話すときは常にそうだった。

「あら、ちよっと待ってね」

しばらくの間があつた。そして扉が開く。

「おはよう。奈美香ちゃん」涼子が微笑んで出迎えてくれた。

「おはようございます、おばさん」奈美香は頭を下げた。「康平君いますか？」

「それがねえ、朝からどこか出かけていったのよ。ごめんね」彼女は申し訳なさそうに言う。

「どこに行ったかわかりますか？」

「それが、わからないのよ。出かけてくるって、それだけ」

「そうですか……」

「ああ、でも昨日、帰ってくるなりタウンページ見てたわね」

「タウンページ……。わかりました。ありがとうございます」

「ごめんね」

再び涼子が謝罪して、扉が閉められた。

猪狩は何を調べていたのだろうか。

帰ってくるなり、ということは、事件がらみなのだろう。真崎の事務所だろうかと奈美香は考える。

彼はやはり何かに気付いたのだろう。奈美香は行ってみる事にした。

だが、一步踏み出して、足を止めた。猪狩の家のインターフォンを再び押した。

「はい？」

「あの、タウンページ貸してもらえませんか？」

第六章 解決する表層の結果と解決しない深層の心理について

1

猪狩は地下鉄の駅から出た。

市の中心地からわずかに外れた場所だった。車の通りも多く、背の高いビルもあるが、よく見るとひび割れなどを起こしている建物も多く、真新しいものは見られない。交通量が多いのも、単純に市街に向かうための通り道だというだけというのが答えのようだ。

猪狩はあるビルの前に立っていた。三階建てのビルで、二階の窓には「真崎探偵事務所」と書かれていた。階段を上り、扉の前で止まる。一度深呼吸をして扉をノックした。

しばらくの沈黙の後「どうぞ」という声。猪狩は中に入った。

部屋の中は整理整頓が行き届いていた。入って左の窓際にはデスク。その前に接客用のソファとテーブル。ソファはテーブルを挟んで向かい合うようになっていた。

右側には食器棚と小さなガスコンロ、水道もあり、真崎はそこでお湯を沸かしていた。

「やあ、やっぱり君だったか」真崎は微笑む。「二十パーセントくらいで矢式さんかなと思ったんだけど」

猪狩は黙っている。

「コーヒー飲むかい？ インスタントだけど」

猪狩は黙って首を横に振った。

ヤカンが音を立てると真崎は火を止めて、取っ手に布巾をかぶせて、マグカップにお湯を注いだ。

結局、二人分のコーヒーを入れて真崎が猪狩の方に歩いてくる。

「まあ、座ってよ」

猪狩はソファに座った。真崎も反対のソファに座る。猪狩の前にマグカップを差し出した。

「お客さんに何も出さないってのもね」

真崎はカップに息を吹きかけて冷ますと一口コーヒーを飲んだ。
猪狩は手を付けなかった。

「さて、今日は何しに？ 何かの依頼ってわけじゃないだろう」

「奈美香が来るかも、って言いましたよね」

「ああ……」真崎は手を額に当てて苦笑した。「迂闊だったね、それは」

「つまり、わかっているんでしょう？」

「犯人がわかったってことだろう？」

「そうです」

「じゃあ、聞かせてもらおうかな」

猪狩は真崎を睨んだ。

「睨まないでくれよ。はあ……」真崎はため息をつく。「その様子だと本当にわかってるみたいだね」

「ええ」

猪狩は次の言葉を躊躇した。しかし、決心して言った。

「どうして、殺した？」

2

真崎は黙ってコーヒーに口をつけた。カップをテーブルに置くと、やがて言った。

「どうして？ 君がそれを聞くとは思わなかったな。興味がないと思っていた」

「何かしらの弁解が聞けると思っただけです」

「弁解、ね……。ないよ、そんなもの。僕は秋山美冬を殺した。動機はある。けれどそれを人に話す意味があるとは思わない。人を殺した罪は変わらないし、同情も求めていない。それよりも、君がどうやって気づいたか気になるな」

「時計」簡単に答える。

「ああ、あれはまずかった」

「なんで密室にしたんですか？」

「ああ、何でだろうね。気づいてほしかったのかな？ 君みたいな誰かに。確かに密室にする事で、事象の不可能性で身を守る事と、気づかれる事によるリスクを天秤にかけてのことではあったけど。だけど、賢い人間ならすぐ気づくだろうからね」

そう言ってから真崎は煙草を取り出し、火をつける。

「でも実際のところ、一番楽な殺し方は通り魔に見せかけた殺人だよ。そして、一番安全なのが、自殺に見せかけることだ。

けど彼女の場合、ガードが固くてどちらも無理だったんだ。で、思いついたのが密室。通り魔では殺せない。自殺に見せかけるのも無理。ならこういう閉鎖的環境で殺すしかない、ならば普通に殺すよりは密室殺人の方が安全と考えた。それだけ。ただ、誰かは気づくと思った。そして、それならそれでもいいと思った」

猪狩は何も喋らない。どう切り出したらいいか、わからなかった。「自首はするよ」猪狩の気持ちを察したかのように言った。

「ばれたから君を殺す。なんてことはないよ。君が気づかなくても自首していたかもしれない。ばれないように色々と細工をしたわけだけど、結局罪の意識から逃れられなくてね」

「じゃあ、なんで……」

「人を殺そうとする人間の気持ちがわかる？」真崎が聞いてくる。論旨がずれていると思ったが、猪狩は答える。

「いや、わからない。わかりたくもない」

「そう。……それが正解だ」

しばらくの間、沈黙があつた。

「彼女も来るのかい？」口を開いたのは真崎だった。

猪狩はすぐに、奈美香のことだとわかった。だが、彼の言い方が「She」のこととも「Girlfriend」のこととも取れるニュアンスだった。猪狩は「She」の事だと思う事にした。

「いや、知らない」

「来ると思うよ。たぶん彼女も気づく。彼女の場合、頭の回転が速いけど無駄が多い。可能性を片っ端から挙げていくからね。君の倍くらいアイディアがあると思うよ。」

そして君はあの時一つも意見を出さなかった。それは、意見が無いんじゃないかと少しでも非合理的な意見は排除しているんじゃないかな、って思った。勘だけだ。

つまり、彼女はとりあえず、数字を埋めてみるんだ。そして、君はしっかりと方程式を組んでから解く、そして答える」

猪狩は驚いた。彼の言うことは、自分の自覚とまったく同じだったからだ。

「だから、彼女じゃなくて君が来ると思った。君の思考には無駄がない」

再び沈黙。真崎は煙草の火を消した。

「じゃあ、そろそろ行くかな」

彼は立ち上がり、扉へと向かった。

3

奈美香は走っていた。気づいてしまった。急いでどうなるわけでもない。会ってどうなるわけでもない。どうするわけでもない。

だが走っていた。人通りは少なかった。たまにすれ違う人々は、走っている奈美香を怪訝そうに見つめるが彼女は気にも留めなかった。

「たぶん、この辺……」

奈美香は真崎探偵事務所の場所を知らなかった。住所だけ調べて、だいたいの位置だけ覚えて、ゆっくり探そうと思ってきた。しかし、途中で気づいてしまった。それからはもう、じっとしていられなかった。

信号機に表示してある住所を頼りにひたすら走ってきた。

信号が赤になり交差点で止まった。膝に手をつき、息も切れはじ

めていた。

「あ……」

顔を上げると交差点の反対側に真崎が立っていた。彼もこちらに気付いたようだ。微笑んでいるように見える。

信号が青になった。

奈美香は動かなかった。真崎はこちらに歩いてくる。

「やあ、こんにちは」真崎はやはり微笑んでいた。「やっぱり、気づいたね」

「ええ」奈美香も微笑み返す。「残念です」

「さようなら」

真崎はそれだけ言って通り過ぎる。

「さようなら」

奈美香もそれだけ返す。奈美香は振り返って、真崎の背中を見えなくなるまで見つめていた。

意外とドライなものだと思った。知り合って数日しか経っていないのは確かだが、自分が彼に好意を持っていたのも確かである。

こつも冷静でいられる理由はわからなかった。案外、自分の感情を自分で理解できるほど人間はよくできているわけではないのかもしれないと思った。

「よお」後ろから声がした。

「あ、康平」

「おう」

何を話せば良いかわからなかった。もつとも、猪狩は話す気すらないかもしれない。居心地の悪い時間だった。

「帰ろうか」猪狩はそれだけ言った。

「うん」奈美香は頷く。

なんだか、安心した気がした。

「いや、全然わからないんだけど」

四人は藤井の部屋にいた。彼はアパートに一人暮らしである。

海で飲めなかった酒は藤井がすべて預かっていた。早いうちに飲んでしまおうということで、彼の家でいわゆる「宅飲み」が開催されたのである。

先ほどの台詞を発したのは藤井だった。

「私もわからない」 怜奈が頷く。「どうやって真崎さんが？ まさか本当に機械でも使ったの？」

「違う。もっと簡単だよ」 猪狩が答える。「テーブルの上にあった鍵はあの部屋の鍵じゃなかった」

「え？」 二人は驚きを隠さずに目を見開いた。

「あの鍵は別の鍵で、つまり、真崎さんの部屋の鍵だ。あの部屋の鍵は彼が持っていた。それで鍵をかけて、第一発見者になって鍵を元に戻す。探偵という職業なら、場を仕切れると踏んだんだろう。」

誰も部屋に入らずに隙を見て鍵をすり替えた。たぶんハンカチで鍵を取ったときだろうね。その中に本当の鍵が入っていた」

「だから、夕食のときに探偵だつて言ったのよ。私が聞かなくても、自分から話していたでしょうね」

「でも、どうやって部屋に入ったの？」 怜奈が首を傾げる。

「推測だけど」と前置きして猪狩は言う。「被害者は真崎さんが探偵だと言ったときに、反応してこつちを見た。探偵に相談したい事があつたんだろう。そして、そう仕向けたのはたぶん真崎さん本人」
「なるほど、でもどうして？ 動機は？」

「それは知らない。真崎さんは通り魔に見せかけて殺すにはガードが固すぎた、と言っていたから、彼女は殺される事を自覚していたんだろう。それ程のことをしていた。そして、その対象が真崎さんだった。それと、例えば、そのことで脅迫状かなにかを送れば探偵に相談したがるんじゃないかな」

「なるほど、警察には言えないしな」 藤井は感心している。怜奈も頷いている。奈美香はわかつている、といった顔をしている。

「全部推測だよ」

「そもそも、どうしてわかったんだ？」

「時計が鳴った」

「時計？ ああ、やっぱりあれって時計だったの？」

「ということは死体に気がついてほしかったということだと思った。そうしないと鍵をすり替えられないから」

「でも、ちよつと杜撰よね。時計を鳴らすなんて不自然すぎるもの。奈美香はふと思いついた。「気づいてほしかった」

「え？」

「そう言っていた」

「よくわからない。密室にまでしておいて、気づいてほしかったって……」

「わからないのが普通だ。俺たちは人を殺した事がないからな」

「まあ、そうだけど……」

「はいはい、もうやめ。犯人は捕まったし、トリックもわかったし、もうこの件は終わりにしよう。せっかく飲んでるんだから、くらい話はやめようぜ」藤井が提案する。

三人もそれに賛成した。結局、物騒な話なんてしたくはないのだ。

エピソード

翌日、猪狩は昼近くまで寝ていた。

「うえ……頭痛え。二日酔いだ……」時計を見ると十一時五十二分。
「水……」呻きながらベッドから起き上がり、一階へ向かう。

「おはよう」猪狩は台所にいた母の涼子に挨拶をした。

「こんにちは」涼子は微笑んだ。

猪狩にはその表情が皮肉っぽく見えた。言葉も然り、こんな時間まで寝ているなということだろう。何も言い返せなかったので黙っていた。

食器棚からコップを取り出し、冷蔵庫の水を注ぐ。そこでインタ―フォンが鳴った。

「はいはい」涼子は今のほうへと向かう。

猪狩は、日本人は不思議だと思った。返事をしても聞こえないのに返事をする。それに相手には見えないのに電話の相手にお辞儀をしたりするのも一緒だ。あれはどういう心理なのだろうと考えたが、二日酔いで頭が痛いので中断。

「はい、ええ……はい」涼子は受話器で話をしている。

受話器を置くと玄関のほうへ歩いていった。

今日は何をしようか、というよりも何もしたくない。気持ちが悪い、奈美香が無理矢理飲ませてきたせいだ。今日はずっと寝ていようか。などと考えていると涼子が猪狩の方にやってきた。

「あんた、何したの？」涼子が神妙な顔で聞いてくる。

「は？」猪狩には何の事だかわからない。

「警察」

「へ？ 何もしてないよ、俺」

「知らないわよ。あんたに用があるって」

訳もわからないまま、立ち上がり玄関へ向かう。

「ちよつと、着替えてからにしないさい！」涼子が叫んだ。

「どうも、道警の伊勢と言います」

伊勢と名乗った男は今に通されソファに座っている。猪狩はクッションに座って向かい合っている。

涼子が麦茶を運んでくる。

「あ、お構いなく」伊勢は片手を挙げた。

「で、何の用ですか？」猪狩は棘々しく言った。

今日は気分が悪いのだ。そこに警察なんかが来ては、たまったものではない。

「ごめんね、すぐ終わるよ」

「ただの二日酔いですから、お構いなく」涼子が言う。

猪狩は涼子を睨んだが、彼女は気にせず部屋を出て行った。

「まあ、和哉の事なんだけど」伊勢が話を切り出した。

「和哉？」

「ああ、真崎って言った方がいいかな？」

「あ、はい。知り合いだったんですか？」

「知り合いって言うか、親友だね。そして過去形でもない」伊勢は微笑んだ。「あいつはいいやつだったよ。いや、いいやつだよ。あいつは人殺しだけど、いいやつで、俺の親友であることに変わりはない。もちろん彼のやったことは許されることではないけど、いいやつであるということとは無関係だ。わかるかな？」

猪狩はわかった、ような気がした。もし、奈美香や藤井、怜奈が人を殺したら同じ事を言うだろうか。

「たぶん」とだけ答えた。

「そう、それは良かった」伊勢はにっこりと笑った。

「で、どうして来たんですか？ 彼は自首でしょう？ 俺には関係ないと思うんですけど」

「うん、今日は非公式だから。和哉が自首する前に電話があってね。びっくりしたよ、人を殺したから自首するって。で、その時、君のことを聞いたわけ。なんとなく嬉しそうだったよ」

三十分ほど話して、伊勢は帰っていった。現場からは特に重要な証拠は残っていなかったという。指紋も毛髪も皮膚も検出されなかった。時計とナイフからウラを取れるかもしれないが、時間がかかりそうだ、自分だけじゃ立件できないから大変だと言っていた。

証拠が無かったにも関わらず彼は罪を認めた。やはり彼は自分の罪の重さに耐えられなかったのだろう。

動機も言っていたが猪狩は忘れてしまった。人が殺人を犯す事になった経緯など興味はなかった。

ただし、それは殺人という行為を軽視しているという意味ではない。殺人は世界に容認されてはならず、動機は関係がないという事でだ。

だいたいは猪狩の想像した通り、個人的な恨みから（と言っても彼と秋山美冬とは面識がなかった。親族を巻き込んだ事件に彼女が関わっていたようである）殺す機会をうかがっていたといった内容だったと思う。そのために探偵になったとも言っていた気がする。警察は彼女が関わっていた事件も捜査し直すとのことだ。

人を殺そうとする人間の気持ちがわかる？ 真崎はそう聞いてきた。

わかりたくない。そう猪狩は答えた。

それが正解。彼はそう言った。

彼は正解を知っていた。しかし、彼は正解することはなかった。そして実行してしまった。

殺人という不正解を。

それは、とても悲しいことに思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0266ba/>

それが正解 改訂版

2012年1月5日20時55分発行